

ローマの博学者ウァロ（その1）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 角田, 幸彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18514

ローマの博学者ウァロ（その1）

角 田 幸 彦

以下のウァロ論は2009年3月21日、私主宰の「ローマ精神史研究会」でレクチャー（120分）したものに多少手を加えたものである。

1

これ迄私はギリシアの二大哲学者プラトン（1冊）、アリストテレス（2冊）、ローマの二大哲学者キケロー（7冊）、セネカ（2冊）と単独執筆本を出版してきた。ギリシアからローマを当初（35年間）見ていた或いは見すぎていた私は、ここ15年間ローマからギリシアを見ることができるようになった¹⁾。ギリシア哲学をただギリシアの枠で研究書や注釈書を積み上げて学び成果を発表するというに私はいささか疑問を持ち、そういう日本の明治時代からの学び方に次第に批判的にもなっていた。余りにギリシアをローマと切り離して掘り進むことは、ローマに継承され、別の味付け、別の世界観で受け取られたギリシアの文物は全く心配りがないことになってしまう。私は35年間ギリシアばかりに集中し、ローマ哲学そしてローマ文化には全然哲学的関心を寄せないで50代半ばまで来た。今ではあきれかえるのだが、それがよいと、「堂々と」ローマ哲学を読むこともなくやってきた。

現代哲学からギリシア哲学へきっぱりと専攻変更をしようと腹を括ったのは、忘れもしない、現代哲学の巨匠ハイデガーの一連のギリシア哲学の言葉の魔術に満ちた解釈に出会ってであった。このハイデガーはヨーロッパの哲

学者中ニーチェと並んでローマ哲学を貶評し、ギリシアの根源的思惟・初発の哲学を薄っぺらい都会風なものにローマ人は作り換えてしまったとした。ローマ人はギリシア哲学やギリシア精神の平板化をなした。ローマ人には本来の哲学性はない、ローマ人は哲学の頹廢の、否、それだけでなくヨーロッパ文化が都市的に頹廢したことの元凶である。ヨーロッパの宗教たるキリスト教もローマ人が組織化して成立したもので、深い一人神の前に立つという孤高性を風化させてしまった、こうニーチェもハイデガーも言い切ってしまう。

ローマ的な広い関心、良きアマチュア性、言葉の社交性、これらのない田舎的都会人我が日本人はニーチェとハイデガーに完全に丸め込まれてきた。これは日本の哲学がドイツ哲学に大きく育まれてきたことと強くつながる片寄りである。フランス哲学がその代わりに受容されたなら、状況は大きく違っていた。

私も全く「同様の日本人」であった。50代半ば迄ローマ哲学など歯牙にかけなかった。ローマ文化、ローマ政治、ローマ精神史全て「用なし」であった。その私がローマ共和制最大の哲学者キケローとローマ帝政最大の哲学者セネカの二人に15年打ち込む「幸せ」を得たのは全く思いもかけないことである。そしてローマ哲学の学びの日々を経て、ローマにもオリジナルな哲学があると堂々と公言できるように私はなってきた。キケローを私が話題にすると、キケローを古代（ギリシア）哲学専攻者は折衷派、ローマ史に属するものは政治的ひより日和見主義者、ハイデガー・ニーチェ路線のドイツ哲学専攻者は単なる雄弁家・非哲学者と異口同音に眉をひそめて言い放った。日本のインテリはことごとく無反省的に、ローマとの縁を結ばないことを「誇り」とすらして、しかも「自前」の判断然としてローマの「悪口」を吹聴し続けてきた。恐ろしいことである。しかし本当のところは、ローマ貶評はニーチェとハイデガーに先立ち19世紀のヘーゲル門下の哲学史家たちに醸成されたローマ評であり、ドイツ精神のなせる業に過ぎない。ヘーゲル門下のツェラー、

シュベグラーによって確立されたドイツのローマ哲学観は、ヘーゲル好きの多い日本ではみるみる浸透していった。併せて日本人が余りにプラトンを「神格化」したこと、アリストテレスの「地味な」探究的な哲学に「畏敬の念で」とらわれたことが我々のローマ貶視を更に大きくしたことも指摘されるべきであろう。

そもそも民族的には、日本人は全然「体系的」でないにも拘わらず、自己に籠る「煎じ詰め精神」が哲学などを志す人間には作動し、ドイツ人の体系的で「突き詰める哲学」に乗って安堵したのである。ローマへの無理解を堂々とつっ走ったのである。

2

日本人の西洋哲学への「開襟」は狭かった。西田幾多郎を皮切りとして、例外者を捜すことが難しい程、日本の哲学はドイツのメンタリティーに育まれ、かつ呑み込まれていった。そこには踏み込んで反省し、「果たしてそれでよいのか？ 我々は過度にドイツの哲学にのめり込んでいるのではないか？」の脚下照顧が皆無であった。しかしこれは「無い袖振れぬ」であったろう。ほんのわずかの哲学研究者がフランス哲学の中に人間を考えるヒューマニスト的「風味」を覚え、ドイツ哲学一辺倒へ反旗を翻した。しかしこのごく少数派の「ドイツ哲学対抗派」にもローマ音痴は克服も反省もされず仕舞いであった。本場のフランスのモラリストや啓蒙時代の輝ける哲学者らとは彼らは全く違っていた。そもそもローマ精神の近代の発見者はフランス人であった。九鬼周造は日本のフランス哲学研究の開祖であるが、彼は全くローマ哲学へは視界を広げなかった。パスカルで真の実存哲学に開眼した三木清とてローマ哲学は遠くのか細い音響だった。彼は専らアリストテレシヤンであり続けた。

日本の「独自の」或いは一応「独創的な」、またそれにいささか連なる哲

学者を列挙すれば、西田幾多郎、左右田喜一郎、波多野精一、田辺元、高橋里美、西谷啓治であろう。私は彼らの著作は、自分がギリシア哲学専攻であったにも拘わらず、ほぼことごとく読破した。特に西田は熟読に熟読を重ね、50代はじめ『西田幾多郎との対話——哲学と宗教をめぐる——』を公刊もしている。田辺の著作もよく開いた。そして、この六人の哲学者中唯の一人もキケローやセネカを全くと言ってよい程読んではいなかったと、私は見ている。他に著名な哲学研究者を更に列記すれば、三木清、戸坂潤、高坂正顕、下村寅太郎、田中美知太郎、出隆、桂寿一が思い浮かぶ。彼らより少し下って森有正、岩崎武雄、野田又夫、斎藤忍随、藤沢令夫がいる。彼らの著書もほぼ読んだ私である。三木清はその若々しい文体の魅力で私には森のそれと共に心に弾みを与える。三木の処女作『パスカルにおける人間の研究』は、フランス的自己省察という哲学思惟を日本にはじめて伝えたものである。彼らの中の田中、斎藤、藤沢の三人は日本におけるギリシア哲学研究の進展と活性化における大きな貢献を（特に田中）果たした。ここで私は特に田中美知太郎のことを思い出す。彼は小林秀雄との対談において「ローマにはギリシアを受け継いだか、独創的哲学はない」と堂々と発言しているのを発見し、毎日キケローとセネカのローマ的創造性の発露たる哲学に驚嘆と感激であった私は大碩学田中の無理解に呆然とした思いがある²⁾。尚田中のギリシア哲学研究は完全にイギリスのギリシア哲学研究に身を寄せたものであり、ドイツのそれ（例えばシュテンツェル、イエーガー、そしてハイデガー、クレーマー、ガイザーの業績）には一顧だにしてはいないことも、かつて私は京大文学部図書室に寄贈されている田中の蔵書群を吟味？する際発見した。赤いアンダーラインをつけられているのは専らイギリスの文献だけであった。ドイツの研究書の頁はことごとく全く綺麗なままだった。

斎藤と藤沢のギリシア哲学研究書も15冊程私は一応開いた。しかし両人はキケローやセネカに言及していないのみならず、そもそもローマ哲学に意

義を認め、評価する言葉を全く残していなかった。

3

私はドイツ（テュービンゲン大学）にプラトンとアリストテレスを学びに1983-84年の一年間滞在した。ギリシア哲学専攻の二人の世界的に名の響いている教授（クレマーとガイザー）に学んだ。この二人はローマの文学についても関心が高かった。歴史哲学と並んで政治哲学に私は大いに関心を持ってきた。ハナ・アーレントの全著作（原書と邦訳）とレオ・シュトラウスの主要作品（原書と邦訳）も熟読したつもりである。アーレントの主著ではないが、昨日『カール・マルクスと西欧政治思想の伝統』（佐藤和夫編，大月書店，2002年）を久し振りに読んだ。そして改めて彼女の他の作品同様、ローマ人の心性・ローマ精神史（そしてキケローの政治思想）への見事な評価的（好意的）文言に出会った。レオ・シュトラウスはローマよりもギリシアの哲学と史述を買うのではあるが、彼も決して「ローマ音痴」でも「ローマ貶視」の人ではない。

私は常々かの大歴史家ランケの言葉をローマへの関わりのモットーとしている。「(ヨーロッパ文化の) それまでの河川は全てローマへ注ぐ。その後河川はことごとくローマから流れ出る。この世にもしローマ人が存在しなかったなら、その後の世界には何物も存在しなかったであろう」（『近世史の諸時代について』）がそれである。敢えて私はこのランケにあやかって次のようにローマの哲学、否、より総合的にローマの文化を価値高く位置付けたい。長いが記す。「ギリシアの哲学そして悲劇作品も史述もことごとくローマ人の精神へ注いだ。それ以後ヨーロッパの悲劇と史述の本質そして言葉の綾はローマの悲劇と史述によって生まれた。つまり決してギリシア人の悲劇と史述によって生まれたのではない。またそれ以後の近世近代の全ての哲学もキケローによって幅広く掘り進まれた気品ある修辞性に富む作品群とセネカの

人間の心の深淵の洞察を織り成したモラリスト性に満ちた作品群の介在なしにはあのような冴えた形を取り得なかった」。

我が日本では、ヨーロッパでは教養の^{かなめ}要であるローマの文物への知識がはぐらかされ、修辞＝文章形成で自己を造ることを怠ってきた。ローマ文化のヨーロッパ文化への測り知れない決定的な意義を全く無視し、意に介さなかった。明治以後のヨーロッパとの出会いは近代的実利的学問（特に法）農・工・医の技術の急ぎ足の吸収でしかなかった為、ヨーロッパ文化の根（Wurzel）が、つまりヨーロッパ文化全体の真の培養土たる哲学的精神（哲学作品ではなく）の学びが全く問題とされなかった。完全に脇に置かれてきた。ヨーロッパの成立はローマ化に他ならない、このことに全く気付かない日本であった。私は20代はじめ大いに西田幾多郎の哲学に引き付けられた。しかし西田の急ぎ過ぎ、ヨーロッパ的教養の根の二つギリシアとローマが、より正しく言うと「ローマであってのギリシア」という根源性が彼には全く通過されてしまったことに徐々に私は不満と批判へ進んでいった。日本の哲学は古代哲学研究とそれへの関心の点では専らプラトンとアリストテレスに「乗って」きた。ローマ哲学の両輪キケローとセネカへのほんのわずかな心配りもなかった。特にカントを哲学の神的原基とする方向と、ヘーゲルの政治・国家・社会のカントにない歴史感覚に満ちた哲学が、日本の哲学界の主流となってしまった。フランス哲学への関心も実にか細かった。デカルトはともかく、パスカルには森有正以外これと言った仕事をした日本人はいない。

4

そして私が忘れられないのは次の西田の「我々は今一度デカルトに還って徹底的に考える（懷疑す）べきである」（「デカルト哲学について」）という名文句である。しかし私は反論する。デカルトはそもそも徹底的に疑うコースを全うしたであろうか、と。彼の意識形成・意識の基層となっているのは

ラテン語での教育である。ラテン語で徹底的に鍛えられ血肉化した言語的世界把握をデカルトが脱して、ただ懐疑、すなわち一切の知識や観念、更に言葉で織り成されている感情、情感から独立するなど出来る筈がない。疑い得ないのは、とにもかくにも、如何に誤謬が混在しようとも、しっかりラテン語でヨーロッパの普遍的文化と普遍的理解性を学んだということではないか。懐疑は遂行の徹底性に支えられるものである。それには一層深い研ぎ澄まされた言葉駆使がなければならない。曖昧この上なくしかも唯一の世界の分析的把握たる言葉に支えられてしか懐疑は成り立たない。懐疑は不断の自己吟味である。懐疑はこの上なく曖昧な存在たる言語という手立てでしか遂行されない。感情、情感、情念も言葉に侵食されている。しかもデカルトにラテン語的精神の教化が問題ではなくなったとは、換言すると言語的思惟というものの根本的制約性が無になったとは到底考えられない。西田が過剰にデカルトの懐疑を尊ぶのは、カント的観念論にとらわれてのものであり、この枠に留まっている。カントから西田はデカルトへ臨んでいる。教養に満ち満ちたローマ性を以て情念論を説くデカルト、懐疑できない人間の情念存在へ執拗に分析を及ぼすデカルト。このデカルトは西田には全く捉えられていない。西田が「懐疑するデカルト」を強調するのは余りに皮相な把握である。既述のように、西田のデカルトへの感情移入は彼のカントへの定位を根本としている。

キケローはよく「教養の奇蹟」と言われる。我々が今論じようとするウァロも「教養の奇蹟」という賞讃に包んでもよい³⁾。そしてデカルトに関して、その懐疑云々へ一気に哲学的に向かうことを少し抑え、彼を育んだ教養・ラテン語的世界を考えてみななければならない。デカルトも教養の奇蹟に近い存在ではなかったか。私がデカルトをここに出した理由は、そもそもヨーロッパの哲学者は我々日本の哲学者、哲学研究者が足元にも及ばない広く深い教養——それはラテン語というローマ人の言語によって徹底的に「絞り上げられたものである」——を身に付けているということである。

西田のことの他に私個人の一つの思い出話を更に綴る。大学哲学専攻卒業の年秋10月、現代哲学に関する卒論の執筆中指導教官のS教授に私の方向転換の決意を告げた。「大学院では古代哲学・ギリシア哲学にテーマを変えたい」と。すぐS教授「それは（その決意は）本物か？」と応じてきた。「はい」とも軽々しく返事はできない内容の話なので、私は黙って頷くだけであった。そして私は「ギリシア哲学を（きちんと）やらないと、本物の哲学者になれないのではないのでしょうか」と私の専攻領域の変更の根底にある思いを吐露した。それに対し、S教授からすぐ「そんなことはない。そんなことがまだ（＝四年次になっても）分からないのか」と普段の温和な物言いとは打って変わった怒りを込めた（と私は身が縮んだ）応答があった。S教授は全くギリシア哲学もローマ哲学も本格的に原典で相対することはない人であり、徹底的に近代哲学がその立脚地であったので、かちんときたことは確かであった⁴⁾。……それ以後私は50年間ギリシアそしてローマの哲学プラトン、アリストテレスそしてキケロー、セネカの学びの道を歩み、計12冊古代哲学の論著を上梓してきたのである。少なくとも「お前の（古代哲学への）志望変更は本物か？」と訊ねたS教授に胸を張って「本物でした」と今は言えるのである。

如何にローマ人が広い教養、博学性に特質のある民族であっても、キケローとセネカの教養世界、博学の業さえ押さえればもう十分であると高を括っていた私であった。ところがギリシア人にはないローマ人の農業哲学——土地に根ざした生活の高度の省察と言い換えられる——に新たな興味が沸いてきた私は、ウァロ（Marcus Terentius Varro 前116-27）の『農業論』（*Res rusticae*）全3巻を開くところとなる。既に彼の『ラテン語論』（*De lingua Latina*）25巻については、キケローに捧げられた著作として私は私の一連のキケロー研究の道程において知っていたものの、近年（5年前から）『ラテン語論』の研究書を多少繙き、ウァロなる人物のいわばイタリアのヴィー

コ張りの語源探究に発酵している粘着力に、キケローともセネカとも違うむしろ一層ローマ的なものに出会った思いがしていた⁹⁾。

今年30年来胸に深く秘めてテーマに向う大仕事、スイスの大歴史家ブルクハルトを『哲学者としての歴史家ブルクハルト』の大きな一著に結実させることができた。次なる仕事として準備をしてきたホメロスに向う前に⁶⁾、ヴァロを少しのぞいてみようとする気持ちが鬱勃として込み上げてきた。それは歴史家ブルクハルトも「教養の奇蹟」（弟子ヴェルフリンの語）と正しく言われるべき博識の人であることから触発されてのことであった。正しくブルクハルトはその徹底したアマチュア性（ディレタント性）においてそして教養の驚嘆すべき広さにおいて真実ローマ的である。

私は3年半前2009年3月21日私主宰の「ローマ精神史研究会」で「ローマ精神から見たローマの農業思想」というテーマで120分間の長いレクチャーをした。この中で大カトー、サセルナ父子、スフロファと共にヴァロを論じ、彼の『農業論』を詳しく紹介した。本稿では、彼の「教養の奇蹟」「驚嘆すべき執筆力」を振り返りつつ、彼の農業論について先述した2009年3月21日の私のレクチャーをいささか再録することにする⁷⁾。彼の全作品中完全にその全体が今日まで残っているのはこの『農業論』のみである。

ヴァロの主著は何と言っても『聖俗故実考』（*Antiquitates rerum humanarum et divinarum*）41巻である。この作品だけでも彼はローマ的知の権化と目され得る。私は主著の概要を知り、哲学は概念や原理へドイツ哲学的に執拗に迫るだけではなく、ローマ的に歴史的展望と多様な事象への心の開きを大切にすべきとしみじみ思うに致った。ローマの哲学者やローマの知的巨人に関する研究書はドイツよりもフランスに優れたものが圧倒的に多い。ヴァロに関してもキケローの書簡の研究の第一人者であるポアシエ（G. Boissier）の *Étude sur Varron*, 1861 が今日も優れた研究書の地位を保っている。

ギリシア精神史をいくら捜してもこのヴァロのようなユニバーサルで、文

系と理系、理論と応用全ての知の形成へ向かう豪毅で探究心の火の玉の如き人物を見出せない。教養すなわち自己の形成とは何か、何であるべきかは、このウァロを見詰めるに如くはない。我々はギリシアで敢えて「ウァロ」を探すとするなら、アリストテレスであると思う。だがウァロのような豊かな知的幅の広さそしてゆとりある知への遊泳はこの大哲学者には実現されていない⁹⁾。

5

我々はローマ的な典型的な学びと教育の熱情すなわち全くギリシア人とは違うローマ人の知性の特質を掘り起こそうとする時——これはこれ迄の日本で全く為されなかった——このウァロに赴くことが決定的となる。キケローは大カトーにローマ的な学びの心性の原本があると指摘した。この大カトーを真に全面的に知の世界で継承した人、それがウァロである。尤も大カトーは大政治家であり、軍人としてもローマ史上頂点に立つ軍統率力を発揮した人物である。執政官コンスルにもなり、執政官職における人格の高潔さで監察官ケンソルにも昇った。このカトーに対し、ウァロは法務官（いわば執政官代理）に迄しか顕職階梯（*cursus honorum*）としては届かなかった。この相違はむしろかえってウァロの人生観（人如何に生きるべきか）を反映した彼の自己抑制を示している。決して彼は全くの非政治的人間ではなかった。この点でアッティクス⁹⁾という当時の大知性人とは根本的に異なっている。ウァロもアッティクスもキケローの友人である。キケローは対抗心を寄せたウァロに対して、人生の難事の相談相手アッティクスという関係の色合いの違いはある。しかし、ウァロはキケローにとっては最も重要な人物であった。

ウァロはかのカエサルとポンペイウスとの戦い（市民戦争）においてはキケローと共にポンペイウス側に加わった。カエサルの勝利後、キケロー同様、カエサルの恩赦を受けて、死刑やローマからの追放とはならなかった。カエ

サルはウァロの博学と書物への並々ならぬ関心をよく知っていたので、ウァロにギリシアとローマの文献を収集する大図書館を作る役割を命じた。これは敢えて言えば、カエサルがウァロの精神的意義を評価したことを示す。カエサル当人も詩人であり文法学者であったのは知る人ぞ知るである。

ローマ人とは何か、ローマの心性とは何か、私はこれ迄キケローとセネカそしてタキトゥス、オウィディウスの四人を専らこの問いの中に立ててきた。これに何としてもウァロを加えてこの五人で新たにローマ的なもの（das Römische）を問う意欲を今持っている。

ローマ人のオリジナリティーは二つの要素から成ると言える。

- (1) ローマ人は「先輩」のギリシアが作った知の世界を築く方法論——区分化と原因の徹底究明——に心を開き、それに素直に従った。と言っても、ローマ人は決してギリシア人の徹底究明性をよしとはせず、問いには結局は不徹底が免れ難いことを認識し、極度の肌理^{きま}の細かさを原理探究には求めなかった。私は今丁度ブルクハルト論の名著を書き上げたところである。そしてブルクハルトにキケローとの親近性を深く感じていたこれ迄の執筆行程とは多少私の思いが違って来た。今はむしろブルクハルトはウァロ的な精神の人ではなかったかと私には思えてきたのである。
- (2) ローマ人はギリシア的な問いをローマの素材、ローマの民族の生と慣習や法制の確立に結合させたものの、ギリシア人がことごとくホメロスへ文化とか思惟や民族心情を結び付けたのに対抗し、ローマ人はローマの始祖の遺風に心の基点を置いた¹⁰。

しかしながら、ローマの百科全書的な知的関心は、近代のフランスの啓蒙主義とは拠って立つ精神を全く異にする。それは、民族の過去、王政から共和制の転換、王政に既に芽生えていた（とローマ人は捉えていた）共和制的国家の骨格であり、共和制の心情への絶大な、否、むしろ絶対的な畏敬の表れである。このようなローマ的な始祖の威風への思いは全く日本の伝統には

ない。ローマ人にとっては王政ではなく共和制こそが国家の根幹と捉えられたのである。啓蒙主義の下での知的関心は過去への指弾、過去の蒙を啓く未来志向を足場とする。フランス啓蒙主義は正しくそうであった。これにマルクスの唯物史観も「乗っかっていた」。労働者への知的教育であったマルクス主義の「啓蒙主義」もフランス啓蒙主義と全く同列である。

フランス革命にその政治プランが実らなかった歴史家マブリーは、フランスの王政の腐敗からの脱却はただローマの共和制しかないことを力説した。20世紀ではマブリーに驚く程近い政治思想を示したのがかのハナ・アレントである。彼女の全ての作品はローマ人を貫く国家創設への畏敬に触れている。『カール・マルクスと西欧政治思想の伝統』（佐藤和夫編，大月書店，2002年）もそうである¹¹⁾。ローマの精神の均衡性，ディレクタント的な広い知的関心，民族の伝統への畏敬，政治的「大人」の知恵，一切のラディカリズムの拒否，貴族層と平民層の協和，これらは早々と滅んだギリシア・アテナイの民主制（200年しか続かなかつた）の撤を踏むまいとするローマの賢慮にことごとくつながっている。

ローマ人の寛容さについて今一つ忘れてならないことがある。彼らは決してローマの民族宗教を征服した近隣や遠隔の異民族や国家に全く強制しなかつた。この寛容性によってこそ後の帝制ローマがキリスト教の信仰を公認するところとなったのである。ローマはキリスト教に乗っ取られることになる。しかしキリスト教を唯一の宗教とすることによって，ギリシア的ローマの宗教と宗教感情が押さえつけられたのは，後のヨーロッパにとって大いなる文化的損失であった。ローマへ迎えられたキリスト教がやがてすぐ正統と異端，カトリック教会とプロテスタントルター派，更にカルヴァン派（改革派）との暴力的で戦争のスケールをも持つ闘争へと，しかも幾重にもこじれねじれた形を採っての闘いへと分裂していく。しかもカルヴァン派という同一宗派の中で正統と異端の恐ろしい不寛容な内部闘争が出てくる。これらのことはローマ人の寛容がキリスト教を公認し，そしてこのキリスト教が非ローマと

言ってよい不寛容を歴史に送り出したことなのである。

世界市民性（Weltbürgertum）の完全な形は19世紀も20世紀も今日も実現されていない。しかし、ローマ人には民族的偏狭さで他民族を蔑視したり虐待したりはしない粋での世界市民性がはっきり示されていた。今日のヨーロッパのヒューマニズムの元基はギリシアではなくローマにある。ローマ人はギリシア人の有した寛容性と比べようもない程の広い寛容性を実現した。

6-1

ここで後世へのウァロの影響、そして89歳迄生きたウァロのローマ精神への浸透を簡潔に記す。尚キケローとセネカの後世の影響については私の9冊の著作に詳しく為されている。

- 1) セネカのウァロ評価（以下、下線部は省略）：ローマ人最大の学識の人（doctissimus Romanorum）『ヘルウィア宛慰めの書』8.1]
- 2) クウィントリアヌス：最大の博学者（erudissimus）『弁論術教程』10.1.95]
- 3) アウグスティヌス：あれだけ書いたら読むひまなどない。あれだけ読んだら書くひまなどない（『神の国』19.1-3]
- 4) スイマクス（Quintius Aurellus Symmachus 340-402, 弁論家，エピストグラファー手紙文学者）：「ローマの学識の父」『書簡』1.2.2]
- 5) ペトラルカ：「ウァロはキケロー， ウェルギリウスに次ぐローマの第三の輝きである」

ローマへのウァロの浸透

- 1) ウェルギリウス（前70-前19）：『農耕詩』
- 2) プリニウス（23/4-79）：『博物誌』

- 3) ユルメッラ (1世紀の人, セネカと同時代人): 60-65年に書かれた12巻の『農業論』
- 4) パッラディウスとウェゲティリス (4世紀の農学者)

6-2

著作について

600巻以上の著作を残したローマーの多作家ウォロであるが、その中身を直接迎ることができるのは『農業論』と『ラテン語論』のみである。ウォロの途方もなく膨大な作品の中で最もウォロ的普遍的展望が繰り広げられているのは以下の1の『聖俗故実考』であるとされている。ローマ的な資料をこのように総合的に布置分析したことは今更ながら彼の学問力を見せしめている。

a) 古代に関する著作

1. *Antiquitates rerum humanarum et divinarum* (『聖俗故実考』) (『人間ならびに神に関する伝承』): 人間に関する25巻と神に関する16巻から成る。この全41巻は単に文化史的な時代を追っての叙述ではなく、テーマ的に区画されたいわば体系的な叙述である。この意味で通常のローマ的な事象追究を超えたいわばギリシア的な「区別する思惟」に立脚している。ウォロは並のローマ人ではなく、ギリシア精神に大きく接近したローマ人である。この意味で彼はキケローに接近している。人間事象 (*res humanae*) の導入部の第1巻に続いて、6巻から成る4部(4テーマ)という展開になっている。人間論(2-7巻), 地域論(8-13巻), 時代史(14-19巻), 風俗論(20-25巻)と続く。大^{ポンティフェクス・マクスムス}神^官カエサルに捧げられた神事論 (*res divinae*) も導入の26巻に続き3巻からなる5部(5テーマ)編成である。神官論(27-29巻), 礼拝場所(30-32巻), 祭事の時期について(33-35巻),

祭式（36-38巻）、神々（39-41巻）。古代という時代幅を飽く迄ローマ建国以後に限定したこと、これはギリシアの目線とは一線を画したローマ人の目である。このことこそアーレントがギリシアにないローマ的特質と認め、その上賞讃をおしまない。

2. *De vita populi Romani*（『ローマ人の生活について』）4巻、43年にキケローの親友でもあるアッティクスに捧げられた。3. *Aetia*（『習俗の発生原因について』）、4. *De gente populi Romani*（『ローマ人の氏族について』）4巻、5. *De familiis Troianis*（『トロイアの家系について』）4巻、^{エトノグラフィー}民族誌的研究、6. *Annales*（『年代記』）、7. *Tribuum liber*（『ローマの部族論』）、8. *Res urbanae*（『都会の様々な現象』）3巻。

b) 言語研究

9. *De lingua Latina*（『ラテン語論』）25巻、キケローに捧げられた。わずか6巻のみ伝わり、しかもかなり欠損箇所がある。この作品は19世紀末から200編を越える研究文献を生み出してきた。この作品のみに集中し邦訳で研究書を著した日本人は、文学博士号を確実に取れると私は見ている。とにかくローブ古典叢書2巻に断片的文言が並べられており、これを誠実に読むことが、実はラテン語の世界、ローマ人の世界像に驚く程光が射し込むのである。私は特にドイツ哲学ギリシア哲学にのみ足を取られている日本の哲学研究者にこのローブ版を繙くことを勧めたい。概念的思惟（カント・ヘーゲル風思惟）に走り込まずにじっくり言葉世界（Sprachwelt）へ「遊ぶ」こと、これが日本の哲学には全く実現されていない。10. *De sermone Latino*（『ラテン語の表現について』）5巻、11. *De similitudine verborum*（『語の類似について』）3巻、12. *De utilitate sermonis*（『表現の効力について』）4巻、13. *De origine linguae Latinae*（『ラテン語の起源について』）3巻。

c) 文芸研究

14. *De poetis* (『詩人について』) 3巻? ローマの詩人リウィウス・アンドロニコスからアッキウス迄の伝記, 15. *De poematis* (『詩について』) 3巻, 16. *Περὶ χαρακτήρων* (『性格について』) 少なくとも3巻, 17. *De proprietate scriptorum* (『作家の特質について』) 3巻, 18. *De descriptionibus* (『描写について』) 3巻, 19. *De scaenicis originibus* (『劇場の起源について』) 3巻, 20. *De actionibus scaenicis* (『役者の演技について』) 3巻, 21. *De actis scaenicis* (『役者の動作について』) 3巻? 22. *De personis* (『登場人物について』) 3巻, 23. *Quaestiones Plautinae* (『喜劇詩人プラウトゥスの問』) 5巻, 24. *De comoediis Plautinis* (『プラウトゥスの喜劇について』) かなりの巻数——尚プラウトゥスは前184年頃死去——, 25. *De compositione saturarum* (『諷刺詩の構成について』), 26. *De lectionibus* (『朗読について』) 3巻, 27. *De antiquitate litterarum* (『文芸の古さについて』) 3巻, 28. *De bibliothecis* (『蔵書について』) 3巻。ここ迄幅広い文芸学的視界がウァロに抱かれていたことは驚くべきである。

d) 個別的分野の著作

29. *Res rusticae* (『農業論』) 3巻, この内容は先に示す。30. *De ora maritima* (『海岸地方について』), 31. *De aestuariis* (『入り江について』), 32. *De litoralibus* (『海岸について』), 33. *De mensuris* (『大きさについて』), 34. *De valetudine tuenda* (『健康を保つことについて』), 35. *De iure civili* (『市民法について』), 36. *De gradibus* (『順序について』), 37. *Rhetorica* (『修辞学』), 38. 彼自身の22編の弁説^{オーラティオー}, 39. *Suasiones* (『弁説訓練』), 40. *De philosophia liber* (『哲学についての書』), アウグスティヌスが『神の国』19.1-3で言及している。41. *De forma philosophiae* (『哲学の形態について』) 3巻, 42. *De principiis numerorum* (『数の原理について』) 9巻, 43. *Logistorici* (『論理学者たち(哲学者たち)』) 76巻, *logistoricus*

なる語はおそらくウァロが初めて用いた。この著作の主要な論究は倫理学（何が人間の生にとって善かの考察）にある。44. *Epistulicae quaestiones*（書簡形式を採る問答）少なくとも7巻。

e) 百科全書的なもの¹²⁾

45. *Disciplinae*（『学問論』）9巻、死の6年前83歳の作品。自由学芸（*artes liberales*）を論じる。この作品は自由学芸に関する最も重要でかつ実際に恐らく最も後世に影響を及ぼしたウァロの作品である。grammatica（文法）、rhetorica（修辞学）、dialectica（弁証法）の三学科（Trivium）と、musica（音楽学）、arithmetica（算術学）、geometria（幾何学）、astrologia（天文学）の四学科（Quadrivium）そして medicina（医学）、architectura（建築学）という視界の学問論である。後に最後の2つは除去されてしまう。このヨーロッパの自由学芸からの医学と建築学の排除は大いなる損失となったと言える。益々そうになっていると思う¹³⁾。健康と病氣、住まい作り、住むに値する温もりのある家そして部屋、庭、ここへ哲学は深く関わらねばならない。身体で考える（ニーチェ）、建てることと考えることの照合・光の交流（ハイデガー）、ここにこそ、ここに赴いてこそ現代の哲学は蘇生できよう。心身の哲学、建てることの哲学。改めて今日哲学はここを掘り起こさねばならない。

46. *Hebdomades vel de imaginibus*（『7人ずつないし《哲学者の》形姿について』）15巻、ギリシアとローマの偉人700人の略歴。君主、將軍、哲学者、詩人、芸術家、発明家など。ウェルギリウス『アエネイス』第6歌のローマ史上の英雄の描写に材料を提供。

f) 詩に関するもの

47. *Poemate*（『詩の数々』）10巻、48. *Satura*（『諷刺詩』）4巻、49. *Singulares libri*（『個別的な内容の書』）教訓詩について叙されている。50.

De rerum natura (『事物の本性について』), 51. *Saturae Menippeae* (『オルベウスの母メニッペーの諷刺詩』), キケローの『アカデミカ』2.1.8に言及されている。52. *Epistular* (『書簡』), Nonias と呼ばれている。

以上我々はウァロの作品群の表題を追うだけでも、唯々ウァロそして彼に最も力強く押し出されたローマ的知の世界に驚嘆する。と同時に、改めてローマ人への畏敬の念に心が高まるのを禁じ得ない。

6-3

ウァロの『農業論』へ入る前に少し『ラテン語論』に私は関説したい(次号に更に論じられる)。ここでは次の二つの業績をまとめて用いる。1. Michael von Albrecht, *Geschichte der römischen Literatur* Bd. 1, Darmstadt 1994 の Varro の叙述 (S. 472-490)。2. Emil Vetter, *Zum Text von Varros Schrift über die Lateinische Sprache*, in: *Rheinisches Museum* 101 (1958), 257-323 (彼ら通りの叙述でなく、私流の換骨奪胎となっていることをお断りする)。

ウァロも彼の親友キケローが大カトーに帰した学ぶ熱気と教える熱気の典型的なローマ人に属する。しかもむしろウァロは大カトーを完全に凌ぐ自己深化と他者教化の巨人であった。ローマの文化的生の全体への目配りには、敢えて言えば19世紀のスイスの大歴史家ブルクハルトの文化史展望に通ずるものがある。彼も他のローマの著述家同様ギリシアの先行研究(先達の見解)を十分に豊かに抱き込みつつ、ローマ人独自の創造性に輝いている。ローマ人として彼はどこ迄も民族的足場を保持する。ローマ人的発信を彼は旨とした。ローマ人の過去——ラテン語はそもそもギリシア語同様に古い成立を持つ——へ定位し、ローマの過去から材料を採ることを彼は言語研究においてローマで本格的に行った唯一人の者である。研究者としてウァロは実践的

(praktisch) — 資料へしっかり目を向けること — でかつ民俗的 (national) である。彼において形を採っている非ギリシア的な方向 (ungriechische Richtung), これを見るためには、『農業論』だけでなく、なんとしても『ラテン語について』というウァロの母国語探索に十分に意を注ぐべきである。彼にはローマ人の心性・キケローにおいても明瞭に示されている心性たるよき古きもの (das gute Alte) を現代 (彼と彼の同胞の生きる時代) へ再び獲得しようという召命感と熱情が漲っている。

しかしウァロはローマにただ張りついていない。彼には世界市民性が現れていた。これは前3世紀の犬儒派の人メニッポス (Menippos) からの強い影響である。ウァロは自己をローマの犬儒派 (cynicus Romanus) と言った。そして彼は彼の時代のローマ人と彼らの誤った物の見方にはっきり批判の矢を放った。この批判とは何か。ローマ人が今の生活にうつつを抜き享樂的であり、古きよきものから学ばないことそして知識層 (貴族や騎士階級) がギリシア的教養に専ら心を寄せることへの批判である。彼のローマ的な敬虔さこそ彼のローマ人批判を大きく鋭利にするところとなっている。そしてウァロはローマ人の神々を、本来ギリシア神話にもとづく不快なことを敢えて快い言葉で表現し (euhemerisch=Unangenehmes mit angenehm Worten sagen) [Me. von Albrecht, *op. cit.*, S. 484], そのことでローマにおける神々は神になった人間 (vergöttliche Menschen) であると言った [De gente populi Romani]。我々はここにキケローと共通の批判精神を見て取ることができる。

さて『ラテン語論』 (*De lingua Latina*) であるが、これは文体が乱れていて手入れが行き届いていないことは否定できない。一方『農業論』 (*De re rustica*) は練り上げられた文体になっていることに誰も異論を出さない。しかしこの差違はよく考える迄もなく説明がつく。農業に関しては経験と知識の積み重ねがあり、最晩年 (80歳) の著作でもあり、十分に整った文体、教育的余裕を示した文体であり、表現は「ローマ的簡潔さ」 (römische

brevitar) に貫かれているし、この実行は容易である。ところが言語論はウェアロにはローマ的先達を持たないし、またそもそも言語の起原・語源についての考察には明解な透徹した叙述は望むべくもないからである。

ウェアロはラテン語の素姓をアイオリス（小アジアのイオニアの上）地方に認めるものの、ラテン語の独自性が次第に豊かになっていくことを強調している。バラタン（M. Baratin, *La naissance de la syntax à Rome*, Paris 1989）によると「ウェアロはラテン語の統辞論（syntaxis）の創設者である〔von Albrecht, *op. cit.*, 482 による〕。ウェアロは文体における declinatio naturalis（自然的な不規則）と declinatio voluntaris（意図的な不規則）を区別することを果たし得た。しかも彼は言語の共時的在り方と通時的在り方にも気付いた。更に彼の友キケローが冗談と真面目の混合（σπουδογέλοιον）を文体で創ったことがウェアロに影響を与えている。

ウェアロは「これらの新しいそして古い語^{ことば}が違ってしまったのは（分かれてしまったのは）、私にそれらの起源（primordia）を探索する勇気を与えてくれる。日常語の中に文字の交換が如何に多様な仕方で生じたかを観察したことがある者なら、語の起源を突き止めようとする試みは（不快なことどころか）むしろ楽しくさせるものである」と述べている〔Emil Vetter, *op. cit.*, 290〕。

私は本稿続篇（2014年6月執筆予定）にてウェアロの『ラテン語論』を更に取り上げることにしている。そしてヴィーコの『ラテン語の起源』より見出されるイタリアの最古の知恵へこの作品をなんらかつなげる抱負があることをここで記しておこう。ヴィーコについての私の取り組みは既に10年以上前から始まっている。その成果は『政治哲学へ向けて』（2010年）に示された。

6-4

ウァロの *Res rusticae*（— これは『農村の事共について』が直訳だが以下『農業論』とする。3巻，前37年）は，この前37年に書かれたというウァロの言葉にも拘わらず，しかしこの作品は実は数年かけて出来たものである¹⁴⁾。37年79歳の時完成したと見るべきである。*De re rustica* は *Res rusticae* という de（～について）なしの，そして複数形の表記もある。ウァロは決して自分の農業の日々の反省をこの作品で経験的に論じてはいない。農業についてカルタゴ人マゴ，ローマの先達大カトー，同時代で農業論を打ち上げたスクロファと意識して対決している。そこにギリシア精神すなわちに自説を開陳するのではなく，対決と批判の精神が発揮されている。更にこのローマやカルタゴの枠を踏み出て，ギリシアのアリストテレスそしてその一番弟子のテオプラストスを読んでいる。アリストテレスの今日伝わっていない植物学関係の書物に目を通していているのである。

ウァロの著作の中で今日まで完全に残っている唯一のものなのに，*De re rustica*（以下 D. r. r. と略記）は近代のウァロ研究の活性化の中であって，驚く程関心の外に放置され，研究の目と考察の努力に迎えられることがなかった。ウァロ研究は専ら *De lingua Latina*（『ラテン語論』）— 先述したように25巻中6巻のみ伝わっている — に集中してきた。こうした事態すなわち D. r. r. 研究のかほそさはその原因を求めるなら，古典学者はそもそも言葉の研究者であることに行き着く。土地を農地化し，土地で植物を育てまた家畜を飼うという人間の生活のそもそもの原本となることへの関心が古典学者には弱いか全く欠落しているからである。古典学者は大学人で都会人である。手前味噌であることを少し書く。私は大学の文学部ではなく農学部に属して哲学，論理学，倫理学を担当してきた。元々全く農業，農作業など関心も問題意識もなかったし，今も基本的にはそうなのだが，ギリシア哲学の学

的完成者と言ってよいアリストテレスを本格的に学ぶうちに、アリストテレスの動物学の中にアリストテレス哲学理解、その中点形而上学理解の決定的な鍵を見出して、連日彼の『動物発生論』『動物部分論』『動物誌』『動物運動論』『動物進行論』を、更に『靈魂論』『生成消滅論』などを注釈書と数多くの研究書を傍らに原典で開くようになった。こういう背景、すなわち動物学的展望、アリストテレスの思惟の根幹へ、「手間隙かけて」誠実にアリストテレスに向かう足場でアリストテレス哲学へ本格的に「突入」したのは日本では私が初めてであろう。この私のアリストテレスへの道は二冊の大きなアリストテレス研究書に実を結び、この成果で文学博士号も受けることになった¹⁵⁾。

こういう素地と「実績」が私をウァロの『農業論』に何の抵抗感もなく向かわせることとなったと言える。しかも学部時代からハイデガー「好き」の私であり、彼の『建てること、住むこと、考えること』(Bauen・Wohnen・Denken)を導きとして私は『景観哲学』に関する二著作も出版していた。ウァロに出会い、私は一瀉千里にウァロの『農業論』に集中した。集中できた。そして私はデンマークのウァロ研究者の細密な分析と農業への精通を見せる一著を入手した。J. E. Skydsgaard, *Varro the Scholar, Studies in the First Book De re Rustica*, Analecta Romana Instituti Danici IV Supplementum, Copenhagen 1968である。彼は、今述べたように、アリストテレスの形而上学の真の把握のためには、彼の動物学者としての中身の濃い研究を手元にたぐり寄せて学ぶべしと私が気付いたことに対応することをこの著者はなんと述べていたのである。「今世紀に至ってもまだ無視され続けた『農業論』は、我々が所有しているウァロの唯一つの完全な作品なのだから、ウァロへの全研究の出発点をそこにこそ我々は求めるべきだ」〔同p. 7〕。

今日でも相変わらずウァロを armchair writer (Stubengelehrter) と見る傾向は根強い。これはアナログカルには、日本人のローマ哲学全般への心の

閉ざし更に貶視——先述のように日本のギリシア哲学の原典による研究の開路者田中美知太郎も完全にここに「はまって」いた——である。そしてローマ的なるものは、ローマ嫌いのハイデガーを超えて、実は大地性、土地のぬくもり、自然との共生（Mitleben）での人間的生の提唱者ハイデガーに通じている。そしてヘッセ好きの私は、ヘッセの中にウァロの農業精神を思うことしきりの今日なのである。ローマ古典学にのみ居城を築く徒はローマ人の大地に根付く発想を偶々まで発揮したローマ性（Römertum）に感ずることはない。今日のテクノロジー世界の根本的問題性に疑問と批判を抱くことが全くないのである。

ウァロは単にヒューマニストであり、世界市民性、教養の脱民族的普遍性を友キケローと共に形成した思索者^{デンカー}に押さえ込まれる存在ではない。キケローの視界に一区画も占めなかったイタリア全土の農業とは如何にあるべきかを、しかも80歳になんなんとする時、ウァロは著わしたのである。これは創獲的偉業と呼ばれるにふさわしい。

ウァロの『農業論』に入る前に彼の農業「哲学」の先駆けを成した者また彼の同時代四人の人物に触れねばならない。カルタゴ人マゴ、大カトー、サセルナ、スクロファである。

1. ローマ農業論の根幹の「名誉」に浴するカルタゴ人マゴ（Mago）

第一次ポエニ戦争（ローマとカルタゴの戦い、前264-241）の後、28巻から成る農業書を著した。第三次ポエニ戦争（前149-146）でローマがカルタゴを潰滅させた後、ローマ元老院はシラヌスという人物にフェニキア語からラテン語に訳させた。外国との長い戦争を勝った後農業の確立はローマには漸くに重要さで捉えられたからである。元老院が外国文献を翻訳させた唯一のケースである。マゴのこの著作には既にギリシア語の縮小^{アブリッジメント}本もあった。ローマの大博物学者プリニウスは、マゴはギリシア語に通じており、ギリシアのアリストテレスやテオプラストスの書物を用いた、と述べている。ウァ

ロはギリシアの哲学者、作家約 50 人の名を列挙して、マゴ絶賛を詠う。「カルタゴ人マゴは名声においてこれらギリシアの学者を超えている」(Hosnobilitate Mago Carthaginienis praeterit)⁶⁹。ローマ人はよく言われるようには、決してエピゴーネンの民族などではない。ローマ人は哲学でも断じてギリシア哲学の平板な継承者、エピゴーネンには甘んじなかった。このことはローマ哲学の最深最大形成者キケローが常に心したことであった。「ギリシア哲学にローマ市民権を賦与すること」、この対決を介しての創造的努力が特に彼の『国家について』に見られる。言う迄もなく、この著作はプラトンの『国家』と張り合ったものである。かくしてこれはローマ国家の思想的骨格(ローマ国家の現実的柔軟さと法的公平さ)を哲学に表現したものとなっている。ローマの農業論もカルタゴとは大きく異なったローマの土地、気候そして火山の存在、山岳の多さを考慮に入れて、ローマの自然に即応した農業形態を探ろうとしていった。ローマ人の地に足のついたオリジナリティーこそが大切である。ドイツ哲学にいまだにしがみついている日本の哲学ではあるまいか。ローマ人は非オリジナリティーにのうのうとしていたなどとの日本人一般の皮相な極め付けをウァロの『農業論』を通して打ち砕かねばならないと言うのは言い過ぎであろうか。尚ウァロはマゴへは 4 回言及している。

2. 質実剛健な共和制ローマの権化大カトー (Marcus Porcius Cato, 前 234-149), キケローの盟友カトー (小カトー) の曾祖父。

「ローマの気高い精神は何ぞや」については、大カトーをプルタルコス『偉人伝』で読むに如くはない。キケローに先立つローマと政治と文化の統合者。キケローは大カトーのことにおよそ 150 回言及している。大カトーは初めてラテン語でローマ史(『起源論』)を執筆した。それ迄のローマ史は全てギリシア語で書かれていた。普段は家事奴隷と同じ食卓に就き、同じ質素な食事をし、ワインは口にしなかった。「怒った時には本当に理をつくして怒れない」とし、大きな間違いをしでかした奴隷に、彼が激怒した時、苛酷

な罰を下すことをあえて抑えたことでも有名である。峻厳一徹であったが、キケローが裁判での小カトーの余りのストア派的怒りを皮肉って、「貴殿の曾祖父のカトーはストア的であるばかりではなかった、実に人間性に富んでいた」と発言した。これに小カトーは微苦笑し、ストア的峻厳な被告許さずの姿勢を改めたという話も伝わっている¹⁷⁾。尚、キケローの弁説は決してイギリス風のユーモアと皮肉、フランス風のエスプリと寸鉄さなど及ばない滋味に満ちたものである。

華美、墮落、ぼけっとしただらしない日常——如何にこれが日本の今日のさばっていることか——を憎み、毎夕の酒や美食を許さない大カトーであった。また彼は若者が文弱になることを恐れ、ギリシアの文芸やギリシア哲学に親しむことを執政官命令で禁じた。しかし当人はギリシア語を完全に身に付けていた。

大カトーの作品としては『農業論』(*De agricultura*)のみ残っている。この著作では農業だけでなく、調理法も言及されている。大カトーの農業書は前2世紀末よく知られた農業書であったが、しかしローマでよく読まれたのは、先に示されたカルタゴのマゴの28巻からなる農業書の縮冊ギリシア語訳の方であった。キケローの『弁論家について』によれば前90年頃ローマではマゴの農業書が支配的権威であった。この大カトーについてセネカと同時代人の農学者コルメッラ(Columella)は、「ローマにラテン語を語ることを教えた最初の人」と讃えている。キケローを再度出すと、彼は大カトーを『ブルトゥス』16, 21で「ローマ散文の父」と呼んだ。因みに「ローマ詩の父」はエンニウスと一般にされている。

3. サセルナ(Saserna)父子

前1世紀前半の彼らの著作についてウァロは不適切な把握が目につくと批判している。それは3つにまとめられる。①この父子の視界が「こちら側のガリア属州」に制限されている。②カルタゴのマゴの『農業論』を誤解した。③大カトーにははっきり出ている理論性を欠く¹⁸⁾。

4. スクロファ (Cn. Tremellius Scrofa), ウァロの仲間, 前 59 年ウァロと共にカエサルの農地委員会の委員に任ぜられる。58 年法務官, 52 か 51 年キュレネーかマケドニアの総督になる。その優美な文体はセネカの同時代の農業者コルメラに賞讃される。ウァロも彼を高く評価した。「現代は農業の全ての事柄についてスクロファに栄誉を与えている」(cui haec aetas defert rerum rusticarum omnium palmam)¹⁹⁾。「スクロファは農業においてローマ人中最も優れた権威である」(Scrofam, qui de agri cultura Romanus peritissimus existimatar)²⁰⁾。この人物は農業労働論といった視角での最初の論究を為した。しかしこの人物の理論はウァロによってしか知り得ない。

6-5

以下, ウァロ『農業論』の内容のあらましを示そう。第 1 巻: (土地への働きかけとしての) 農業, 第 2 巻: 家畜, 具体的に言うと牛, 馬, 羊, 第 3 巻: 家禽かきん, 具体的にはにわとりとアヒル, 闘戯用の鳥, 蜜蜂。尚かつて私はアリストテレスの『動物誌』で蜜蜂について生態観察の細かな記述を読んで, 改めてアリストテレスの生き物への広い関心と研究に心打たれたことがあることも付記したい。

A) 第 1 巻: 若妻フダニアが, 自分の死後, 一人で農業経営に当たることを慮って, 農業経営の指導書を作ったウァロであった。妻想いのウァロの言葉を二つだけ引用しよう。「私の 80 歳の年齢は, 私が人生から旅立つ前に, 荷をまとめるように注告している」〔同 1.1〕。「私はお前のために 3 巻の書物を著す。それを, お前が農場でどうしたらよいかその場その場で知りたいと思った時, 開くとよい」²¹⁾。

植物の繁殖について以下の 4 つの場合が出されている。(1)目に見えない,

空気中にある種子によって……これはアナクサゴラスの主張でもある。(2)種子を播くことによって……テオプラストスが引用され、種子の種類によって播く季節が相違することが説かれる。(3)新芽、若木 (surculus) を大地に植えることによって。(4)接ぎ木 (clavola とか talea とか inoculatio, emplastratio という4つの語が用いられている) によって。

接ぎ木²²⁾を行うに際して4つの注意が列記される。(i)接ぎ木（接ぎ枝）を採る木の種類、(ii)接ぎ木をほどこす木の種類、(iii)接ぎ木を行う正しい時期、(iv)接ぎ木の技法。

(i)と(ii)の問題は密接している。ウァロはこれにはわずかしか言葉を出さない。梨はりんごに接ぎ木してもよいが、オーク（ナラ、カシ）には接ぎ木してはいけない。そして更に注意される。接ぎ木を受け入れる木の幹は接ぎ木される枝よりも上質の植物であるべきだ、と。(iii)については一切言及がされない。(iv)については取り木（英語の layering）という「最近の発見」(nuper animadversa) という別のやり方 (altera species) が記される。前に名前が出てきた Skydsgaard によると、ウァロの接ぎ木の記述には、哲学者テオプラストス（ギリシア最大の植物学者でもあった）を丹念に読んだ跡が見られる。

B) 第2巻：家畜、特に牛の飼育が重要視されている。

この序文〔II. 6〕には次のように書かれている。「《農業に関して》(De agri cultura) の巻——第1巻のこと——は私の妻フダニアのために書かれたのだが、この第2巻は我が友ニゲル (Turramias Niger) よ、君に捧げることにする。君は牛がとても好きだからね」。ではウァロは全3巻中ただ第1巻のみを妻のために書き、他の2つの巻は妻のことは念頭になかったのであろうか。或いは数年の執筆行程で、妻をはっきり贈り主として執筆したことをウァロは忘れてしまったのであろうか。これに対し、マルタンは次のような解決となる解釈を提示する。ウァロは書き始めた当初は、自分の人生に残された時間はそう長くはないと強く感じていた。しかし執筆に身を呈

し始めると「お呼びが近い」ことはなさそうに覚え、彼は筆を前へ前へと進めた。妻一人だけではなく、友人にも農場経営の参考となる手引きを書こうという気持ちが抑え難く湧いてきた。妻にはかなり理解に困難な学理的で他の農学者や植物学者との対決的叙述も混じってきた。とは言え、結局のところこれら全3巻は妻に捧げた農園経営の手引であることは否定する必要がある²³⁾。

第2巻のウェアロの言葉を引いておこう。「私は牛の飼育というテーマについて簡潔にその全体に筆を運ぼう。こんなことは私には何ら造作のないことだ。私は沢山の牛を所有しているし、アフリカには羊を、レアテには馬を持っているのだから」〔同書Ⅱ.6〕。

C) 第3巻：農場の動物、家禽、蜜蜂の他に養魚池の魚、若干の野禽についても言及される。語源的な対処が多い。『農業論』全3巻でこの巻についての考察が最も少ない。文献表の③のK. D. Whiteもこの第3巻には考察をしていない。

「人間の生き方には田舎の生き方 (*vita rustica*) と都市の生き方 (*vita urbana*) がある。この相違は場所 (*locus*) にあるだけではない。時間 (*tempus*) にもある。田舎の生活ははるかに古い (*antiquior multo rustica*)」〔同書Ⅲ.1.1〕。ウェアロがエンニウス (Ennius 239-169) を引用し、鳥の飼育に入るところのみ紹介しよう。「700年を少し越えるか少しすくない歳月が我々にはある。威厳に満ちた鳥トによって栄光あるローマが創設されて以来 (*Septingenti sunt paulo plus aut minus anni, augusto augurio postquam inclita condita Roma est.*)」²⁴⁾。

語源学的な対応は第3巻に多いが、全巻に散らばっている。ウェアロのそうした意図は何であったか。それは、キケローには及ばないもののウェアロのサービス精神、エンターテイナー的気遣いが出ているのである。D. r. r. の読者はどういう階層に属するか。言う迄もなく堅実な生と富裕な生を統合できている農民であった。しかも彼らは大カトーの『農業論』を読んでいた。そし

てこの書物の無味乾燥に物足りなさを彼らは覚えていた。ワァロは彼らの知的好奇心を満たすことを計算していた。語源へ話をつなげて読ませるものを書くこのサービス精神はキケローにも強く押し出されている。

ローマ共和制末期（前60年以後）、階級の協和（concordia ordinum）——元老院と騎士階級、貴族と平民の協和——とイタリア全国民（市民権を有する者たち）の合意（consensus Italiae）は最早国家政治に力を示すことがなくなっていった。騎士階級（経済を握る富裕層）は政治への無関与・無関心へ傾き、私生活の華美、美酒・美食に次第にのめり込んでいった。カエサルの独裁権に共和制擁護でぶつかっていくことは「火中の栗を拾う」覚悟が必要であり、政治からの逃避が広がっていた。ワァロのD. r. r. はキケローの死刑の14年後、カエサル暗殺はその2年前となっており、第二次三頭政治（オクタウィアヌス、アントニウス、レピドゥス）の時代である。「共和国（＝国家）は滅んだ」（res publica amissa. キケローの語）時代である。カエサル独裁時代はまだかろうじて共和制がか弱いながら呼吸していたが、最早それも終わった。ワァロのこの作品は、こういう時代背景の下^{もと}、意欲された面もある。蓄財と贅沢な日々を喜ぶ農村の富貴層に、自分も大地で働くことがローマ人の古い重々しい生き甲斐のあることを、実は妻への指導書の外装の下^{もと}、訴えたというところにこの作品の警世の叫び（一種のキケローの性）が響いていると言うべきである。

6-6

文献紹介 1. 全体的なローマ農業論について

① K. D. White, *Roman Farming*, London 1970. 最も標準的なもの

② W. H. Stahl, *Roman Science Origins, Development, and Influence to the Later Middle Ages*, The University of Wisconsin Press 1962.

文献紹介 2. ワァロに関するもの

③ K. D. White, *Roman Agricultural Writers I: Varro and his Predecessors*, in: *Aufstieg und Niedergang der römischen Welt*, Berlin 1973. ウァロのローマ精神史的意義についてこの論文は重要この上ない。上記①の著者の名論稿である。

④ M. von Albrecht, *Geschichte der römischen Literatur I. Varro Leben*, Datierung 472-490. 500 編に及ぶウァロ研究文献が載っている。

⑤ M. Schans-C. Hosius, *M. Terentius Varro, 555-576*, in: dieselben, *Geschichte der römischen Literatur bis zum Gesetzgebungswerk des Kaisers Justinian*, München 1927 (Neudruck 1959).

⑥ W. D. Hooper, *M. Terentius Varro On Agriculture* [Loeb C. L.] 1934 (1999).

⑦ D. Flach, *M. Terentius Varro Über die Landwirtschaft*, Darmstadt 2006. 尚 Flach はローマ法研究「十二表法」の研究でも立派な仕事をしている。私は『キケロー 裁判弁説の精神史的考察』(2010) で彼のローマ法制史研究を取り上げている。

文献紹介 3. ウァロの言語論

⑧ R. G. Kent, *Translation Varro De Lingua Latina*, Loeb C. L. 1938 (1977).

⑨ E. Vetter, *Zum Text von Varros Schrift über die lateinische Sprache*, in: *Rheinisches Museum* 101 (1958), 257-285, 289-323.

文献紹介 4. ローマの農学者の精神史

⑩ E. Rawson, *Intellectual Life in the Late Roman Republic*, London 1985. ローマ哲学史, ローマ文芸史, ローマの詩, ローマの史書などについての労作は, 日本人には想像がつかない程欧米には数多くある。しかし精神史的なローマへの接近としてはこのローソン女史のものが最も優れている。

6-7

ウァロの *Disciplinae* (『学問論』) — 自由学芸論について

既述したようにウァロは *Disciplinae* — 著作一覧の 45 — *artes liberales* について論じ、*Trivium* (三学科) として *grammatica, rhetorica, dialectica*, *Quadrivium* (四学科) として *musica, arithmetica, geometrica, astrologia* を出し、それに加えて *medicina, architectura* を立て 9 学科を *artes liberales* とした。後にアウグスティヌス (354-430) とカルタゴ生まれの教養論の著者マルティアヌス・カペッラ (5 世紀後半) によって *medicina* と *architectura* は除去されてしまう²⁵⁾。これは私に言わせると、人間の最も基本的な生き方である健康を目指し、心休まる住まいを工夫することを全く軽視する冷やかさとなっている。ローマ的精神は *medicina* と *architectura* を人間の自己形成の大切な要素としたことにおいてこそギリシア精神とは根本的に異なっている。自己形成、自由になるための学びは言葉と数学 (系譜学) でよしとするのではなく、身体、身体という精神にしっかりと向かわねばならない。身体を健全に保つことは精神の健全さを「下から」支えることであり、住まいに心を配ること、満ち足りていること (*zufrieden sein*) こそが住まうことの本義であるとは、ハイデガーの説くところである。真に自由に生きること、それは人間らしく生きることであり、日常的生を自覚的に哲学のテーマにすべきである。私はウァロの折角の提言を理解しようとしなかったことに、教養文化、否、教育一般の不幸がヨーロッパ文化全体に纏綿^{てんめん}していると言いたい。

教養について改めて物申すと、日本でも哲学そのものを貫いている全体認識という本質性が見えていない。欧米では哲学は *Trivium* と *Quadrivium* の総合・統合という趣きははっきりしている。一方日本の哲学は *Trivium* への関心がほぼなしに学としての哲学、科学の基礎付けの哲学に無反省的に

走ってきた。修辞学的表現の磨きは日本の哲学者には全く意に介されていないままになった。

しかし欧米でも日本同様ウァロの出した *medicina* と *architectura* への哲学的関心は全く表れてこなかった、或るいは傍流になっていたと言ってよい。私は *rhetorica* を *dialectica* 以上に大切にしたいし、*medicina* と *architectura* を抱き込んで哲学を歩みたいのである。私はブルクハルトに関する大きな著作を今回著したが、ブルクハルトに血肉化したストア派的・エピクロス派的両派の両立の生を益々よしとするようになっている。そしてここにおいて、正しい生、健全な生、住むという生、存在の基盤としての住むことにブルクハルトが実によく心を開いていることに気付いたのである。*architectura* は都市の生と田舎の生（街と自然と家々）そして文化と自然の共鳴である。人間は、地上に場所を借りて住んでいるという感謝を持たねばならない。そして様々の医学領域の世話になって生きているし生きるであろうという感謝にも貫かれなければならない。人間としてよく生きることはウァロの人間観を改めて考えてみることである。大地、建てること、住むこと、生きること、文化と自然の共鳴に心すること、これらこそ今日哲学の主題とならなければならない。よく軽々しく「日本人は自然と共生してきたが、ヨーロッパ（西洋）は自然を対象化し、手段化してきた」などと言われている。しかしこれ程思慮に欠けた発言はない。我々はウァロを読むだけでも、そしてローマの自然との睦みある生を教えられるだけでも、こうした傲慢な日本讃歌を認めるわけにはいかなくなる。

毎日ブルクハルトの執筆行程にあった私は、ウァロとブルクハルトを強く結び付けつつある自分を発見した。ブルクハルトは開かれたヨーロッパ人であると共に、実によく郷土魂を作品群に表現したスイス人である。ウァロもヨーロッパの「教養世界——教養とは何であるべきか」の視界を開いたと同時に、典型的なローマ人であった。大地と農業にギリシア人以上に絆を結ん

でいたのがローマ人であったが、ウァロの精神はこういうローマ人をローマの如何なる人物よりもよく表現している。ウァロは友キケロー以上にローマ人であった。15年間私はキケローを読み、キケロー研究文献の山の中で日々送った。これは別段誇張ではない。9年間で7冊も私はキケロー研究書を出版したのである。この私にキケローにないウァロの魅力あるもう一つのローマ性が呼び掛けてきたのはここ数年のことである。次号に私はウァロと私の深まった関係を綴るのを愉しみにしている。

尚ブルクハルトにとってローマ史（ローマ精神史）がどんなに大きな関心だったかは、ブルクハルト絶讃も述べているドイツの現代最高のローマ史家カール・クリストが初めて掘り起こしてくれた²⁶⁾ことも忘れるべきではない。19世紀の教養の奇蹟ブルクハルトとウァロ、この両者の親和性は欧米のブルクハルト研究者誰一人として言及していない。更に私は詩人オウィディウス（前43-後17/18）の詩的形象の世界をブルクハルトにつなげて目下深く考えていることも付記しておきたい。

〈注〉

- 1) 私は西洋中世史家堀米庸三の愛読者でもある。彼の論著は高度に学問的水準の高いものから一般人向け歴史書また随筆集も全て読んだ。その中で、私のローマ精神史研究に小さな書物だが大きな支えとなっているものが『中世の光と影』（上・下、講談社学術文庫、1978年）の41頁の文言である。彼は、スペインの歴史家・文明批評家コラルを引用し、ヨーロッパは極度に一般化の難しい、継受の極度に困難なローマ文化を——ギリシア文化ではなく——唯一の指導者にしたと書いている。ヨーロッパ人に難しいのであるから、我々日本人にはローマ精神・ローマ文化への理解はもっと難しい。ローマ哲学を、それまでのギリシア哲学との縁を一端断って猛然と学び始めていた私には、思わぬ所から鼓舞の至言が到来したのだ。但しこの堀米自身は「中世史止り」で、ローマ精神史（römische Geistesgeschichte）に本格的関心も燃やさず、この領域に何ら業績を挙げることはなかった。残念である。
- 2) 『小林秀雄対談集』講談社、1966年、314頁。率直に言って私は田中美知太郎のローマ貶評の完全なローマ誤解に呆然とした以上に、フランス・モラリスト、

フランス精神との「対話」で成長した筈の小林秀雄が唯「ふんふん」と田中に応じ、「いやそうではないのでないか。ローマ人のヒューマニズム、ローマ人の一見折衷的思考の中の落ち着いて先行思想を理解する平衡感覚があったよ」と田中に反論できなかったことに、頭の良い小林故に、がっかりしたことを今更のように思い出す。「哲学屋」はギリシア絶讃、ローマ軽視に走るのは「世の常」（一般傾向）である。そこを練るのが、よりヨーロッパ精神に通じている筈の文芸評論家ではないか。小林も河上徹太郎、中村光夫など私の愛読した文芸評論の面々がローマ文芸のギリシア悲劇・喜劇、抒情詩を超えた風味と深い人間観察力（フランス・モラリストのむしろ原基である）に全く音痴だったが、それ以上に田中への「やっぱり」という思い以上の「悲しい」思いが私にこみ上げてきた。

- 3) 私が「教養の奇蹟」と押さえているのは三人であり、三人のみである。二人はローマ人でケケローとウァロであり、他の一人は19世紀スイスの大歴史家ブルクハルトである。ケケローについては私は既に7冊公刊した。ブルクハルトについては今回大著を上梓できた。ウァロは割を食った博識家である。彼の教養の広い緑野を巡ること、ここへこれから私は歩み入ろうとしている。教養 (παιδεία, Bildung) とは何かではなく、何であるべきかという自己反省的問いが皆無の日本において、この三者の真の教養巨人性を我々は学ばねばならない。そしてこの三者を通して、初めてプラトンの哲学は全面、学としてではなく教養としての世界形成だったことが分かるのである。
- 4) 「デカルトの懷疑」をデカルトを賞讃したり近世哲学の祖と強調する者たち（西田幾多郎も然り）は、デカルトが懷疑すること以上に、人間の日常性（日常感覚）の省察者であったことへ心を開いていない。そしてデカルト対ヴィーコとの対抗軸で改めてデカルトを問うてみようともしない。私は『政治哲学へ向けて』（2010年）の第2章「ケケローとヴィーコ」（74-136頁）でヴィーコをデカルトと対決させた。ギリシア哲学就中プラトンとアリストテレスの精読は哲学を進めていく場合、幾度も自己の今を照らす足場とならなければならない。今回完成した拙著『哲学者としての歴史家ブルクハルト——プラトン・オウィディウス・ルーベンス・精神史と共に——』は、ブルクハルトがプラトンとアリストテレス——前者では『パイドン』『ティマイオス』『国家』を、後者では『政治学』を彼は通読 (durchlesen) した——に深く心を寄せたことを掘り起こしている。私の長年読み続けているハイデガーはどうかと言うと、彼はアリストテレスの『形而上学』に10年以上執着し、自家薬籠中のものとした。ハイデガーは学生にプラトンの熟読を勧めた。彼に学び、後にハイデルベルク大学の神学教授になったピヒト (Georg Picht 1903-1982) はプラトンとアリストテレスの研究からスタートし、幅広い哲学視界を持つようになった。ハイデガーの高弟中の高弟で解釈学のガダマー (Hans-Georg Gadamer 1900-2002) はプラトン研究から著作を書き始めた。やはりハイデガーの高弟で政治思想研究で不朽の業績を挙げたアーレ

ント（Hannah Arendt 1906-75）もプラトンとキケローの、特にキケローの実に細やかな解釈が出来た。フーコー（Michel Foucault 1926-84）もローマ帝政最大の哲学者セネカを十分理解し、大いに引用した。こういうことは枚挙にいとまがない。差し当たり私の日頃開いている哲学書の作家たちを挙げたにすぎない。日本の哲学研究者は圧倒的に近世・近代・現代のヨーロッパ哲学との縁で仕事をしてきた。私には到底納得がいかないのである。

- 5) キケロー→セネカ→ワロ、これが私のローマ哲学、ローマ精神史研究の歩みである。ギリシア哲学ではプラトン→アリストテレス→（改めて）ソクラテスという進み方である。
- 6) 『キケロー』『セネカ』を公刊した私は次に『ホメロス』を同じ出版社清水書院で上梓する。
- 7) この2009年3月の私のワロ発表ではかなり沢山のワロに関する研究文献を用いて、内容を濃くした。本稿ではこの目配りは省かせていただく。
- 8) 我々はワロを単に文献学に精読するといういわば客観化的手法に服すべきではない。ワロの精神を問わねばならない。専門の仕事に専らとなること、客観的・調査的冷ややかさ、時代精神につなげず一個人（哲学者、文学者、芸術家）に集中する幅のなさ、これらを抜本的に改めない限り、日本では精神科学（Geisteswissenschaft）は実は生まれえない。精神科学とは何ぞやをただディルタイの諸作品を追って考えてもダメである。日本には精神科学としての哲学（これこそ真の哲学である）が全くない。
- 9) アッティクス（T. Pomponius Atticus 前110-32）についても日本では全く関心が出ていない。キケローの親友、キケローの政治問題、家族関係での悩み、悲しみを綴る数多くの書簡がアッティクスに送られている。エピクロス派であり、一切ローマ政治に、従ってスッラとマリウス、カエサルとポンペイウスとの争いにも中立を保った。しかしスッラのローマ支配の時期には危険を感じ前86年ローマを去り、アテナイに滞在した。アッティクスと呼ばれたのは、アテナイをこよなく愛したギリシア崇拜者であるとしてポンポニウスに付けられた添え名である。前65年から20年振りにローマへ戻り、ここに住む。そして彼の恐らく一度切りの政治参加はキケローの味方をして前63年カティリーナの陰謀への闘争であった。彼はキケローの「天敵」クロディウス、キケローのライバルたちカエサル、キケローがどうにも好きになれなかったポンペイウスとも交誼を結んだ。この点はキケローの気に入らないアッティクス不信ともなっている。著作としては *liber annalis*（ローマ史）の小冊子、ローマの名家の家系史、名士伝、キケローの『私の執政官職について』の注釈がある。「政治家アッティクス」については唯一つ次著が出版されている。H. Ziegler, *T. P. Atticus als Politiker*, München 1936.
- 10) ローマ人が繰り広げたギリシアへの反撥からギリシアの摂取、ギリシアへの感

動から自己の伝統への帰還。このことが全ヨーロッパの精神史として流れ出る。正しくローマ人がいなければ、ヨーロッパ文化は存在しなかったという歴史家ランケの言葉は至言である。

- 11) アメリカ合衆国の独立の哲学、新しく議会政治を敷設することに、ローマの共和制の精神と機構がモデルになったのは有名である。今日でも国家の混乱の回避、国家内の協和の確立はローマ共和制に還るべしという側面が必要であると私は考えている。これは決して民族主義、伝統主義、保守主義等のレッテルで片付けられない知恵ある選択ではなからうか。丸ごと共和制ローマに従うのではなく、批判的に対しつつもこの制度を改めて見直すべき今日の世界状況でなからうか。アーレントの陥ったローマ賞讃に乗り込む（入れあげる）ことはしてはいけない。
- 12) 一般教育（*ἐγκυκλία παιδεία*）は日常的（＝非専門的）知識の習得なのだが、決して専門知を水で薄めた概説的、入門的知ではない。むしろ流派に本格的「専門的」知であり、体系的（筋のある、包括的）な学びである。人間が豊かに自分と世界へ関わる精神の成長の大切さという「哲学」に厳然と送り出されている。一般教育、教養教育を考えることはよく為されている。流行である。或いは今ではもう流行遅れかも知れない。とにかく一般教育を云々する前に我々はワエロの「百科全書的なもの」の中に見出す彼の仕事に思いを致さなければならない。その完全な中身は伝わっていないにせよ、ここに言及した欧米の研究書は繕うべきである。

ワエロやキケローがパイディア（*παιδεία*）という語を訳す必要に迫られた時、ラテン語の *humanitas* にきめたという事実は、注目に値する。

これはアンリ・イレネ・マルーの著作『古代教育文化史』（*Henri-Irénée Marrou, Histoire de L'éducation dans L'antiquité*, Paris, 1498. 邦訳の上記名は横尾壮英他訳、岩波書店、1985年の文言である（120頁）。

ローマはギリシアの教育観念に大きく影響されたと同時に、ローマ人はギリシアの教育枠に体育があることには全面的に反発的反応しか示さなかった。ギリシア文化の盲目的な摂取はローマ人は如何なる文化領域でも持たなかったが、彼らの体育嫌いは異常な程強かった。しかしにも拘わらず戦争ではギリシア勢とカルタゴもエトルリアも近隣のアジアの強国も最終的にはローマに完全に打ち負かされたのである。

上に出ている『文法論（*Grammatica*）』—『諸学問論・自由学芸論』（*Disciplinarum libri*）の第1巻—は、ローマの中等教育で最初の教科書であったと推察されるとマルーは前掲書で述べている（304頁）。

- 13) 私はハイデガーとブルクハルトと長らく関わって建築（*Baukunst, Architektur*）とは何であるか、如何なる存在性を有する芸術かについて考えている。そして建築という住むことの基礎を作る働きが単なる技術（*Kunst*）に終わらずに芸術（*schöne Kunst*）—尚 *schöne Kunst* なる語がドイツ語で出来たのは

1875年である——になるべきことで彼らに同感している。そしてローマにおける広場と街と路の建築その裏に発動している建築精神、ここを捉えないままのローマ哲学、ローマ文芸、ローマ史書研究はローマ理解、ローマ認識の途中に留まっているとすら私は思う。建てること（bauen）と考えること（denken）この対項性を媒介する住むこと（wohnen）、このことはハイデガーが全く思いも寄らないローマ人の大地的な生という観念につなげなければならない。

- 14) ギリシア精神と明別されるべきローマ精神は大地への執心、農業への愛着である。ここで再びマルーを引用する。「ローマの若者は、ただ、田舎の賢い地主に不可欠なもの、とりわけ農事に関する知識を学んだ」（前掲訳書、290頁）。我々はローマ人のギリシア人にならざる学問的重点は農学と法学であることを認めなければならない。ローマの裁判はギリシアのそれとは違い、高度な訴訟手続を必要とする法体系を前提としており、判例を重要視して「争われた」。医学は健康の管理が中心であって、ローマにはギリシアのような病理学（τὸ αἰτιολογικόν, aetiology）に立脚した学問的医学は生じていない。ローマ哲学に長らく打ち込んだ私は、学びを始めてから12年後から法学と裁判弁論に自分でも驚く程興味を抱くようになった。農的なものと法的なるものを大切と思わない限り、ローマ人の心性、ローマ精神史は遠のいたままである。ヴァロの『農業論』研究には、Dieter Flachの独訳と解説 *M. T. Varro Über die Landwirtschaft*, Darmstadt 2006が現在では最も有益である。
- 15) アリストテレスには専ら、天文現象、地上の生き物が関心であって、農事には全く目を向けなかった。しかし彼が自然を言葉（ギリシア語）で、すなわち数式的記号を用いず全面的に把握できると腹を括ったところに、私は今論じているローマ人の農業への深い思いとのつながりを見て取るのである。ローマ人、今我々が向かっているヴァロは農業についての問いを言葉（ラテン語という母語）についての問い——語源——に強く結び付けているからである。
- 16) Varro, *Res rusticae* I. 1. 10.
- 17) 拙著『キケロー 裁判弁論の精神的考察』（2010年）『『ムーレーナ弁論』』230-279頁を見られたい。特に265頁。
- 18) Elizabeth Rawson, *Intellectual Life in the Late Roman Republic*, London 1988, p. 131.
- 19) Varro, *op. cit.*, II. 1. 11.
- 20) Varro, *op. cit.*, I. 2. 10.
- 21) Varro, *op. cit.*, I. 4. 3.
- 22) Varro, *op. cit.*, I. 1. 1. プリニウス（C. Plinius Secundus 23/24-79）の『博物誌』にも接ぎ木について、その多様な方法が記されている。接ぎ木は単に木を植えて果実を待つということではない。他の生命から（接ぎ木）された枝が自分の生命を造り出すことである。ギリシア人にも接木という工夫があったか定かでは

ない。果樹園経営において接ぎ木そして様々なその仕方を工夫することは極めて大きな意味を持つ。プリニウスが果樹園の経営や裁判法について、先達の大カトー、ウァロ、ウェルギリウス、コルメラなどから多くを学んだことははっきりしている。こう紹介する中野里美は『ローマのプリニウス』（光陽出版社、2008年）で更に次のように書いている。

彼（プリニウス）は学問の先達キケローの「土の味わいをもった軟膏^{ばんこう}は、サフランの匂いをもった軟膏に勝る」という言葉を紹介しながら、芳香の味わいをもつ土地があればそれが最良の土地であるとし、果樹、とくにオリーブとブドウの栽培方法について事細かに展開したのである（同 162頁）。

プリニウスもウァロに肩を並べる大博学者であった。『騎兵の槍の使い方について』『友人ポンペイウス・セコンドゥス伝』『ゲルマン戦争史』『ストコディオスイス（雄弁術について）』『修辭法について』『（ネロの敵対者）アウフィディオス・パッスの終わりから』そして37巻の『博物誌』である。現在迄残っているこの膨大な著作には400人の著述者（うち146人がローマ人）が引用されている。軍人であり役人であったプリニウスは、仕事を終え毎日深夜まで執筆した。ポンペイへ行き、ヴェスビオス火山の噴火の調査（79年）中亡くなった。

23) cf. R. Martin, *Recherches sur les agronomes latins*, Paris 1971, p. 50.

24) Varro, *op. cit.*, III. 1. 2.

25) マルティアヌス・カペッラ (Martianus Capella) が何故医学と建築術を自由学科から外したかについては、新プラトン派に影響されてのことらしい。では何故新プラトン派は身体を治療する術の医学と人間の住まいを作る建築術を貶評したか。手を汚す「仕事」を嫌うのはローマ人ならざるギリシア人の特質であった。新プラトン派はこの「血筋」を引いている。ローマ人は体育好きのギリシア人と全くメンタリティーを異にし、記述したところだが、ギリシア人が裸体で闘ったり競争することを卑しいこと、野蛮なことと蔑んだ。

我々日本人は、ギリシア・ローマ文化とした括り方を自明とし、ローマをギリシアの弟分にして垂流と見倣してきた。一般人ならいざ知らず、知識人・大学人しかも文系大学人、更に哲学専攻者もほぼ全員この大変な誤解に今もなずんでいる。そしてローマ史専攻の某氏との或る日の対話をここで私は思い出す。私がキケローのローマ的創造性を語っているのに、すぐ反撥を示し、「でもキケローは弱気ですから」とこのクリスチアンの大学教授は言い返してきた。キリスト教徒のローマでの迫害史専攻のこの研究者は、最もローマ人らしいまたローマの哲学の確立者にしてヨーロッパ・ヒューマニズムのキケローを全く学校教科書的なレッテルで見ている。驚き呆れた私であった。ローマ史専攻でこの体たらしく人士も日本には今も他にも厳存している。先の某大学教授こそは日本人のキケロー理解の典型であった。

26) Kari Christ, *Jacob Burckhardt und die Römische Geschichte*, in: *Saeculum*

14 (1963), S. 82-122. このローマ史家はローマ史のみでなく、ドイツにおけるローマ史研究史のいわば専門家である。私もドイツのローマ史研究の足跡を19世紀初頭から一応辿ったのであるが、この19世紀のドイツは余りにローマ国政史中心で、全く精神史的でないことに不満と批判を抱かざるを得なかった。クリストは実に精神史的である。彼にはブルクハルトそしてディルタイの影響がはっきり働いている。尚、クリストの『ローマ史とドイツの歴史学』(*Römische Geschichte und deutsche Geschichtswissenschaft*, München 1982) は私の愛読書の一冊である。全394頁中97頁に亘ってのヒトラー・ナチズム下のドイツのローマ史学界でのユダヤ系学者の運命そしてナチズムの御用学者となったゲルマン系学者の叙述は極めて興味深い。彼のカエサル研究 (*Caesar Annäherungen an einen Diktator*, München 1994) を私は一連のキケロー研究書において大いに活用したことも付言したい。

(かくた・ゆきひこ 元教授)